

## (144) 群馬県水上町の阿能川(大峰)鉱山

参考文献(1)に、この鉱山についての解説がある。最盛期には従業員が1000人に及んだそうである。阿能川の上流にあり、大鉱山であったようである。これは是非とも探査をしたいと考えた。しかし、他の文献には、水上駅から西南6kmに位置する、の記述がある。これはちょうど大峰山の位置に合致する。とすれば、この大峰山麓にあったに違いないと考えたが、この鉱山は阿能川鉱山としても稼業していたそうである。阿能川は、大峰山のだいぶ北方に位置する。また、「・・・西部の鉱床は吾妻耶山東麓に存在し、いずれも阿能川上流の支流より開坑している・・・」との記述もある。鉱山の位置は??? の状態であった。

参考文献(2)、(3)にも、この鉱山についての解説があった。が、共に鉱山位置については、参考文献(1)と同じく、確証が得られていなかった。そのうち、鉱山位置を間違いなく確認できる資料として参考文献(4)を入手できた。100年以上昔の明治40年発行で、当時の日本の黒鉱産出鉱山を調査した文献である。この文献には、阿能川鉱山の項があり、解説文と共に、鉱山近傍の地形図付きであった。この地形図は現在の地形図と非常に良く対照することができた。そして、容易に坑口位置を確定することができた。

以上のような事前調査の結果を手にして、阿能川上流で、吾妻耶山北麓の探査に出かけた。結果、一応1箇所では鉱山跡を確認することができた。

入手した複数の資料から、総合的に判断すると、阿能川鉱山は吾妻耶山の北部(阿能川支流部)と東部(寺間沢上流部)の2箇所に主たる鉱床があったようである。文献(4)には、鉱床は東南方向に延びており、探査が望まれるようなことは書いてあった。東部は文献(4)以降に開発されたものと思われる。

北部の1箇所だけでの探査結果であり、未だ未だ探査は不十分であるが、この時点で一応第一報としてまとめ上げることにした。参照した資料、及び参考文献名を掲載しているので、探査に興味のある読者は、本報告書を参考にし、探査を試みることを勧める。

現地への経路は次の通りである。関越道を水上ICで降り、291号を北上していく。阿能川に架かっている橋を通過したら、直ぐに左折し、猿ヶ京温泉に向かって270号に入っていく。後は道なりである。

2015年5月探査

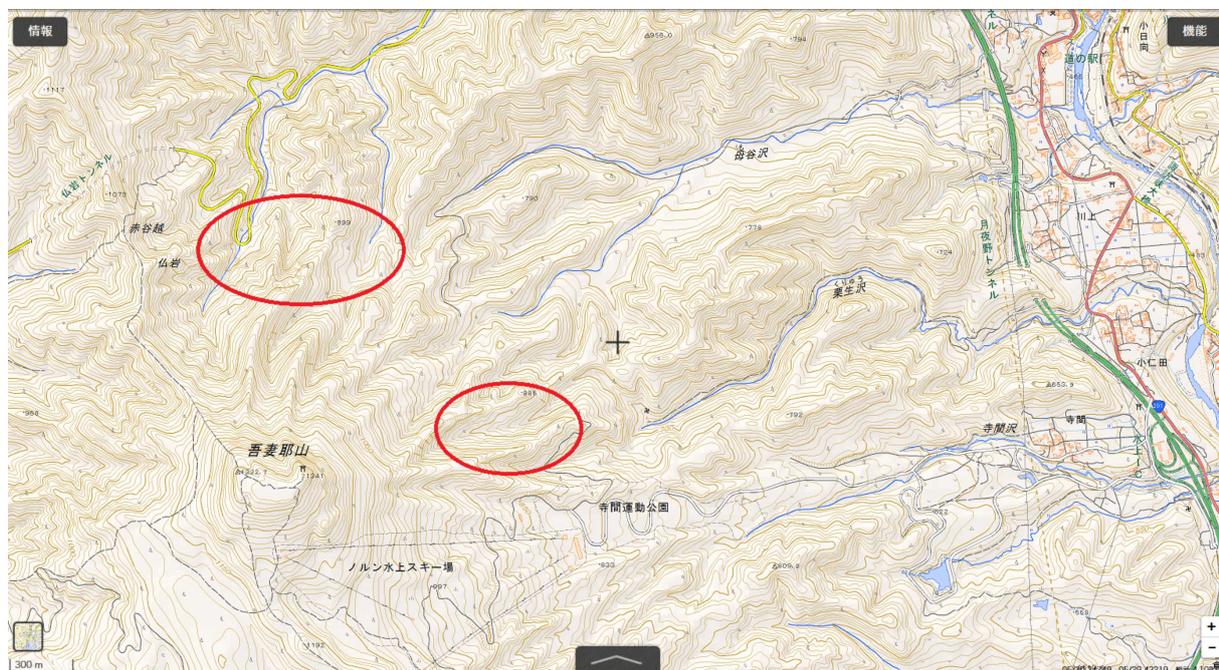


図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。幾つかの資料によれば、阿能川(大峰)鉱山は吾妻耶山の北側と、東側にあったらしい。そのあたりに赤丸を記している。北側の探査を行った。が、北側の探査は未だ不十分であり、東側はノルン水上スキー場の入口付近に行っただけであり、未探査である。

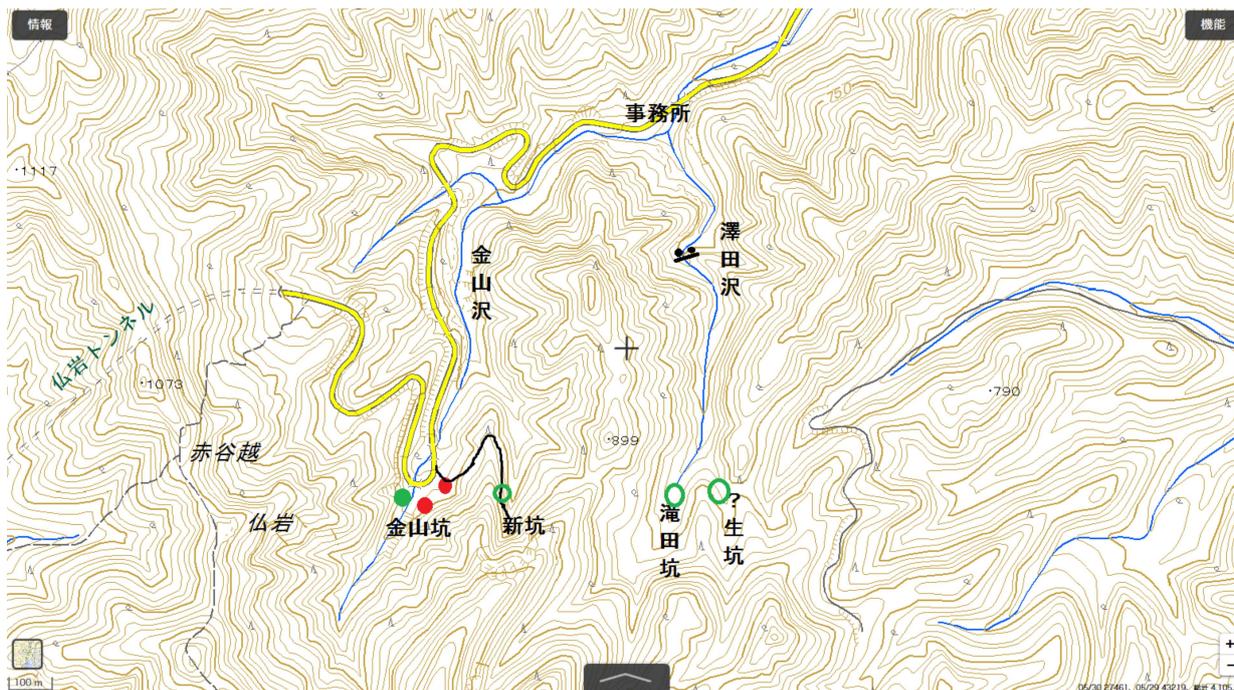


図2 吾妻耶山北部で、阿能川上流部の拡大図。黄緑丸が坑口跡。赤丸が2箇所の鉱山施設跡。上流側の赤丸は重機を取り付けていたと思われるコンクリート基礎跡、下流側は2連の四角形状コンクリート擁壁跡。火薬庫であったのであろうか？ 横列の3箇所の黄緑環は参考文献（後掲の図3参照）から予想される坑口跡。黒線は辛くも残っている林道。新坑は確認できていない。その先で、林道は斜面の崩壊で消失していたので、先には進んでいない。従って、先にあつたろう林道は見つけない。



図3 Google earthより。滝田坑と？生坑のあたりに、小さな路地部分が見てとれる。多分、これらが各坑跡と思われる。が、未だたどり着いてはいない。これらには、東側から林道が延びてきているのが、図2よりわかるし、また、図4にはその付近に鉱山道があつたことが見てとれる。このルートならばたどり着けるのではないであろうか。

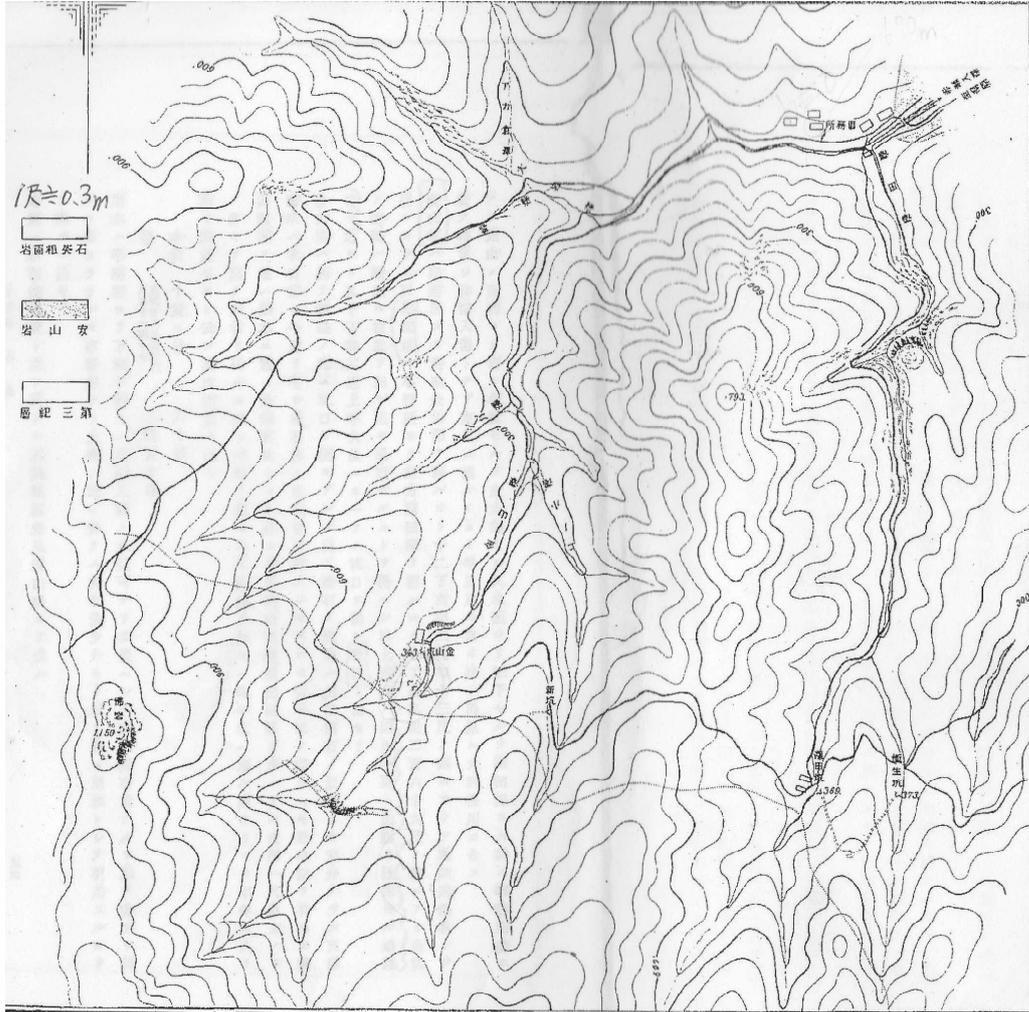


図4 文献(4)より複写。現在の地形図と対照させると、容易に、鉱山施設跡、坑口跡を確定できる。図中の数値は、右上部にある鉱山事務所からの相対標高であり、単位は尺(1尺≒0.3m)。事務所跡は、澤田沢出合いにあった。現在では道路脇に木々に埋もれて、比較的平らな箇所が残っている。かつては、阿能川から金山沢を登り上がり、金山坑にたどり着いていた。現在では270号が金山沢に沿って登り上がり、峠を抜けている。どうも、金山坑付近の様相は、270号の開設・拡幅で全く様変わりをしたようであるが、生き残っている坑口跡らしい箇所、施設跡は確認することができた。事務所跡から、澤田沢を遡った先に、澤田坑と？生坑がある。金山沢坑から山をトラバースするように鉱山道が繋がっている。この鉱山道を金山沢坑跡から辿ったが「新坑」の先で道が崩壊しており、また、先の道を見つげかねたので途中で断念した。それならばとして、澤田沢出合いから、これらの探査を目指して沢を登り上がったが、直に滝に阻まれて断念した。



図5 Google earthより。図3のより広域の地形写真である。地形図1と対照できる。吾妻耶山の東部、赤丸の領域に、路地部が見てとれる。文献による「東部」の鉱床跡に合致していそうである。スキー場入口まで行き、そこから林道が延びていることは確認したが、先に入っていないので、未探査である。この林道を辿っていけば、行き着けそうである。

## 鉱山跡写真



写真1 赤山沢に架かっている最上流の橋。手前左側から沢に入れる。なを、道路前方のコンクリート擁壁が、排水で茶色に着色している。奥に、金属鉱物岩がある証拠である。あつた坑口をコンクリートで埋めたのであろうか？ 廃鉱山で偶にある処理である。



写真2 赤山沢左岸の、河床より少し高い所にあつた「坑口」らしい跡。中央の黒い所であるが、若葉などで覆われて見難い。橋の直ぐ傍である。



写真3 右岸にあったコンクリート台。垂直に埋め込んだボルトが残っている。鉱山跡に時折見かける「重機」の設置基礎と思われる。先方に見える明るい所は、270号の道路である。つまり道路の直ぐ傍。



写真4 「新坑」を目指して、山に分け入る。表示板とコンクリート擁壁の間からは比較的容易に登り上がれる。登った先には、写真5で示している石垣組の鉱山施設跡らしいものがある。



写真5 登って直ぐの所に、石垣組があった。石垣を防壁とした火薬庫跡かも。



写真6 林道は初め明瞭ではないが、直に山の斜面を横断するようになって明瞭となっていく。途中に「新坑」を見つけることはできなかった。更に進んでいくと、林道は土砂でかき消えており、先にも、林道らしいものを見つけられなかったなので、このあたりで引き返した。



写真7 澤田沢出合付近の270号である。橋の先は少し平である。事務所があったあたりと一致している。澤田沢へは、橋を渡って、左へ進んで沢に降り立つ。目の先に澤田沢が流れ込んでいる。



写真8 澤田沢には、図4中で記されているように、左岸に沿って鉱山道があった。が、全くその痕跡は見つけることができなかったので、沢を遡ることにした。直に、滝に出会った。簡単に登り切れそうがないので、ここで戻った。

## 鉱物写真

なし。

## 参考文献

- (1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。
- (2)「群馬県大峰鉱山調査報告」、林昇一朗、高瀬博、地質調査所月報(第3巻 第10号)、)
- (3)「福島県鉱山誌」、福島県、1964年。
- (4)「黒鉱調査報文 第貳回」、農商務省、明治43年、インターネットで、「近代デジタルライブラリー」よりダウンロード。